第十四講　文学論・演劇論

シェイクスピアの『マクベス』第五幕に、夫をそそのかして主君を暗殺したマクベス夫人が、死の直前に錯乱する有名な場面がある。夢遊病者のように夜中に徘徊（はいかい）し、手をこすりながら呟（つぶや）く。「消えてしまえ、呪（のろ）わしいしみ！　早く消えろというのに！　一つ、二つ、おや、もう時間だ。地獄って、なんて陰気なのだろう！（中略）まだ血の臭いがする」。幻視、幻聴、幻臭が一挙に夫人を襲うのである。

『リア王』を例にあげるまでもなく、シェイクスピアは強い意志のエネルギーをもった人間が、その強さゆえに復讐（ふくしゅう）され錯乱する様態、首飾りの糸が切れ、それぞれの玉が飛び散ってしまうように、一人の人間を調和あるものとさせている五感の分裂状態を描く天才である。描くとは、文字に書かれているから言いうることなので、演劇の舞台にそくしていえば、錯乱とはどのように見えないものかを想像させる、というべきだろう。演劇とは見えないものを見えるようにすると思っている人たちもいるが、それは逆で、見えるものを通して見えないものを想像させたり、直感させたりするところにその表現の本質がある。［ a ］この場面を演出するときに、血のしみや時計の音や地獄を思わせるような具体物を持ち出すことは意味をなさない。言葉の音楽的な側面と身体的な集中の質によって、一人の人間の見えない意識状態を想像させる演技をする以外にはないのである。

昨年から今年にかけて、私はカフカの小説『変身』をロシア人と日本人が演じる舞台を見た。いずれも演出はロシアのメイエルホリド・シアター・センターの芸術総監督ヴァレリー・フォーキンである。カフカの『変身』は次のような書き出しで始まる。「ある朝、グレゴール・ザムザが気がかりな夢から目ざめたとき、自分がベッドの上で、一匹の巨大な毒虫に変ってしまっているのに気づいた」。

この言葉どおり、舞台でも一人の男が虫に変身する。［ b ］、ベッドの上で手足を震わせ、虫を思わせるしぐさをしだすのである。そして最後まで俳優は、二本足で立つことはなく、床を這（は）いずりながら虫として死を迎える。演技とは物真似（ものまね）であるという言葉があるが、字句どおりに虫の真似が身体的に行われているのである。その振り付けは、力量のある俳優のみが身につけうる種類の見事なもので、小説の内容とは関係なく楽しめるのである。とくに野外劇場で上演された日本のそれは、木々の中をも

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

虫が徘徊したりする演出の巧みさもあって、哀(かな)しい虫の一生が展開される童話のような出来具合になっていた。

この舞台の演出と演技を楽しみながら、私はその半面、演劇という表現ジャンルがそなえている利点と、それゆえの落とし穴のようなものに思いをはせざるをえなかった。それは、演劇が演出しだいであらゆるものごとを視覚的に楽しませることができるために、＜　A　＞という行為の大切さを一瞬忘れさせてしまうことである。

[c]、カフカの『変身』の毒虫は現実の虫のことではない。人間のことである。人間の自意識の一つの在り方を文字に置き換え表現したものである。人間を虫として描写し、人間存在の孤独とその恐怖をあばきえたのは、文学者としてのカフカの創造行為の力であるが、その文学的な表現である虫を視覚的に変換し存在させれば、『変身』の本質を見させることができるわけではない。カフカ自身もこの小説が出版されるにあたり、出版社に次のような挿絵についての注文をしている。「虫そのものが描かれてはなりません。遠くからでさえも描かれてはなりません」。

ものごとを理解することは、ものごとを視覚的に了解することだと演劇にかかわる人たちが思いだしたのは、いつのことであろうか。むろん、ものごとをはっきりと見ることが、対象を我がものとして理解することだとは昔から日本人も考えてきた。心を見る、湯加減を見る、ひとを見る、などと言ってきたのである。しかし、この＜見る＞とは、ものごとを視覚的に了解する行為だけを意味するわけではない。むしろ、それだけでは対象を理解することが不可能だから、＜見る＞と言ったのである。

現在の社会は視覚を軸にした情報社会である。そしてその特徴は、ものごとの背後にある見えないものを見させるのではなく、見えるものだけを優先して価値判断する社会だということである。特にマスコミにおいて社会という言葉が一般的に用いられるようになり、我が国における社会の未成熟あるいは特異なあり方が覆い隠されるという事態になったのである。イラク戦争などをテレビで見ても、私はいまこそ見えるものだけからものごとを考えるのではなく、見えるもののうちに浸透したり、その背後に存在している見えないものを、＜見る＞という行為によって感知する力を取り戻さなければならないと感じる。そこにこそ、芸術家や芸術創造の存在理由があると改めて思うのである。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問１　前の文中には、論旨の展開からいって余分な文が一つ入れてある。それはどれか。その文の初めと終わりの三文字を答えよ（句読点なども一字と数える）。

問２　文中の空欄［A］に入るもっとも適当な語句を、次の中から選べ。
①　見えるものを見る　②　見たくないものを見る
③　見たいものを見る　④　見えないものを見る

問３　文中の空欄［a］〜［c］に入るもっとも適当な語句を、次の中から選べ（ただし、同じものを二度以上用いてはならない）。
①　というより　②　だから　③　やはり　④　たとえば　⑤　たかだか

問４　傍線部「心を見る、湯加減を見る、ひとを見る」とあるが、それらの「見る」と違った用法を持つものが次の中に一つだけあるとすれば、それはどれか。もっとも適当なものを選べ。
①　味を見る　②　世相を見る　③　図面を見る　④　時代を見る

問５　本文の論旨に合わないものが次の中に二つあるとすれば、それはどれとどれか。もっとも適当なものを選べ。
①　人間の五感の分裂状態は文章で書くことが不可能であるから、かえって演劇という舞台を通してそれを示して行こうという動きが出て来た。
②　見るものを通して何かを想像させるということが大切であるという考え方に沿って、演劇における演出はなされるべきである。
③　カフカは人間が虫になるという話を小説に書いたが、それは人間の意識の奥底を描こうとしたのであり、単なる形態の変容の面白さをめざしたのではない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

④　ものをはっきりと見つめることが難しくなった時代では、現実を見据える目よりも、想像の世界を見つめる目を養う方が大切である。

⑤　見えるものがさまざまに交錯する現代こそ、見えないものを想像するという芸術の本質が改めて見直されなければならない。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十四講　知識モノ解説

文学史・人物解説

●鈴木忠志＝すずき　ただし（一九三九〜）→現代を代表する演出家。
「見えるものと見ること―感知する力」

●ウィリアム・シェイクスピア（一五六四〜一六一六）→英国を代表する劇作家。
代表作『ハムレット』『ジュリアス・シーザー』『アントニーとクレオパトラ』『テンペスト』『ロミオとジュリエット』など

●フランツ・カフカ（一八八三〜一九二四）→チェコのドイツ語作家。
代表作『変身』『城』『審判』『オドラデク』
日本の作家、安部公房（あべ　こうぼう　一九二四〜一九九三）も自分への影響を告白している。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題　第十四講

次の傍線部にあたる漢字を、次の各選択肢から選びなさい。

（ア）恐ろしいゲンチョウが聞こえる
（イ）ムユウ病者のように徘徊する
（ウ）五感のブンレツ状態を描く
（エ）舞台を巧みにエンシュツする
（オ）新作映画のカントクに起用する
（カ）外国小説がシュッパンされる
（キ）湯カゲンをみて調節する
（ク）見えるものをまずユウセンする
（ケ）日本社会のトクイなあり方を分析する
（コ）人生のコドクを耐えしのぶ

	①	②	③	④	⑤
（ア）	眩	原	幻	玄	呟
（イ）	誘	夕	有	遊	悠
（ウ）	列	烈	裂	劣	埒
（エ）	演	園	宴	艶	縁
（オ）	篤	得	読	督	匿
（カ）	伴	汎	班	版	帆
（キ）	加	舌	下	火	科
（ク）	裕	憂	宥	優	雄
（ケ）	以	意	異	違	威
（コ）	個	小	狐	児	孤

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

第十四講　文学論・演劇論

《本文の対比構造》

主役

筆者の見解＝演劇とは、見えるものを通して見えないものを想像させるもの／見えるものの背後にある見えないものを見る力・感知する力

主な対比

敵役

他の演劇関係者＝演劇とは、見えないものを見えるようにするもの

現代社会＝視覚重視の情報社会

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

《解説》

問１《余計な文を指摘》

早稲田大や中央大でよく出題される形式です。オリジナルの文章に対し入試用の加工を加えているわけで原文筆者に失礼なことおびただしい！　ですが、対比に注目して読むことで、発見できます。つまりこの設問も文章を対比で読みなさいよ、といっているのです。さて、最終段落冒頭にて「見えないものを見させる（筆者側）⟷見えるものだけ優先（敵役側）」の、正しい対比が展開されます。ところが、突然「社会の未成熟」という言葉が登場します。本文は「社会の未成熟⟷社会の成熟」という対比ではないはず。つまり正しい対比喪失の誤りを犯しているこの文を指摘します。

問２《空欄補充・選択肢》

［A］は、「大切さ」ということばにつながることからわかるように、筆者側主役キーワードを求めています。①は対比混乱の誤りで視覚重視の方です。②③の「見たくない⟷見たい」は正しい対比喪失の誤りです。そんなこと比べてない！

問３《接続語空欄補充・選択肢》

［a］は、順接です。前文が、見えないものこそ本質という内容で、その後、目に見える「具体物～意味をなさない」につながるからです。②「だから」ときまります。［b］は「変身する」をより適切な表現「しぐさをしだす」に言い換えています。逆接あるいは比較を導く①「というより」が正解。［c］の前段落では「演劇という表現ジャンル」という大きな話をして、［c］から「カフカの『変身』」という具体例になります。したがって④「たとえば」と決まります。

問４《傍線部説明・選択肢》

傍線部は、見るは見るでも、視覚以上の〈見る〉のことで、広義の見る、感知する力のことです。これと違ったものとは、文字通りの視覚、狭義の見るにあたる③です。

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

問５《主題理解・選択肢》

問違い探しの問題です。①は「人間の五感の分裂状態は文章で書くことが不可能」が、第二段落「人間を〜五感の分裂状態を描く」シェイクスピアの話と矛盾します。つまり記述に反する誤りで、解答に採用します。②③⑤はもちろん、本文の正しい対比に合致します。④は、まず「ものをはっきりと見つめることが難しくなった時代」が×です。現代は見えるもの重視だったはず。記述に反する誤りです。さらに「現実を見据える目⟷想像の世界を見つめる目」が正しい対比喪失の誤りです。本文は「見たまま重視⟷見えない背後まで想像」という対比です。ファンタジーを推奨しているわけではありませんね。というわけで④を採用します。

模範解答

問１＝特にマ〜ある。　問２＝④　問３　a＝②　b＝①　c＝④　問４＝③　問５＝①④（順不同）

© RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。

復習問題解答　第十四講

（ア）③　（イ）④　（ウ）③　（エ）①　（オ）④
（カ）④　（キ）①　（ク）④　（ケ）③　（コ）⑤

解答漢字一覧

（ア）幻聴　（イ）夢遊　（ウ）分裂　（エ）演出　（オ）監督
（カ）出版　（キ）加減　（ク）優先　（ケ）特異　（コ）孤独

Ⓒ RECRUIT HOLDINGS
本サービスに関する知的財産権その他一切の権利は著作権者に帰属します。
また本サービスに掲載の全部または一部につき無断複製・転載を禁止します。